



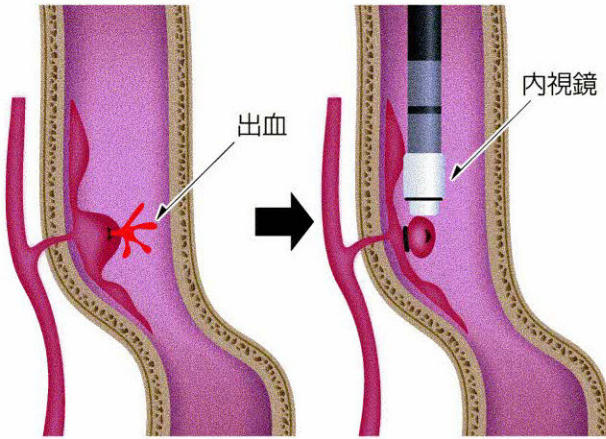
内視鏡的静脈瘤結紮術（EVL）は、内視鏡（胃カメラ）の先端につけたキャップの中に静脈瘤を吸引し、根元をゴムバンド

やまなし
医療最前線
救急現場 24時
県立中央病院から
〈159〉

50代の男性が意識を失い、吐血して救急搬送された。アンモニア臭があり、肝性脳症を併発している疑いもある。男性のアルコール多飲歴が確認でき、採血検査で肝機能障害と貧血が認められた。アルコール性肝硬変による食道静脈瘤破裂と判断。輸血、補液、昇圧剤を投与し、血圧が安定したところで上部消化管内視鏡検査を実施。破裂部位に対し、内視鏡的静脈瘤結紮術（EVL）を行い、20分後に止血を完了した。その後、肝性脳症は改善。入院1週間後の内視鏡検査でも治療が必要な静脈瘤はなく、退院した。

肝硬変による食道静脈瘤破裂 内視鏡使い20分で止血

内視鏡的静脈瘤結紮術による止血



出血部位の確認

ゴムバンドで結紮

ドで止めて血流を遮断する治療法。食道静脈瘤の出血に対してまず最初に選択される治療法で、技術的には比較的簡便な手

技とされる。消化器内科の小嶋裕一郎医師によると、まず上部消化管内視鏡検査を行い、出血している静脈瘤を確認後、治療を行う。同病院では、止血後にも再度EVLか、同様に内視鏡を使って静脈瘤の血管内や周囲に硬化剤を注入する硬化療法を行い、静脈瘤の血流は可能な限り消失させる。食道や胃の静脈瘤は、

肝硬変などが原因で肝臓の中を流れにくくなった血液の迂回路として発達。自覚症状がほとんどないまま吐血、出血し、最悪の場合は出血性ショックで死に至ることもある。このため「肝硬変がある患者は定期的の内視鏡検査をする必要がある」と小嶋医師は指摘。破裂のリスクが高い静脈瘤があれば、予防としてEVLや硬化療法を行うという。

同病院では、内視鏡センターと救命救急センターが密接に連携。「県内医療の最後のとりで」として、大出血に対する緊急治療を県内で最も多く行っている」と小嶋医師は自負する。「スタツフ一同がその自覚を持ち、治療が難しい症例にも積極的に臨む姿勢を忘れないことをモットーにしている」と力強い。第2、4木曜日に掲載します